

日本コンテナ輸送

国際海上コンテナの パイオニアとして

(楚の熊渠子)が夜間行軍したとき、横たわる石を見て、てっきり虎がうずくまっているものと思い込み、勢いよく矢を発した。すると、射抜けるはずのない石を射抜き、金の鏃から矢羽根まで石の中にめりこんでいた。『韓詩外伝』にある

「石に立つ矢」の故事であり、一つのことばに専念すれば何事も成就できる。誠心誠意、事にあたれば、不可能なことも成し遂げられる…と努力を鼓舞した教えでもある。日本コンテナ輸送(株)代表取締役社長・土屋 廣明氏は、日本に初めて外航コンテナ船が就航した1967年に日本郵船(株)と日本通運(株)の共同出資により設立された、日本国内の海上コンテナ輸送のパイオニア。以来半世紀近くにわたり国際間の海上貨物輸送のコンテナ化の歩みと共に、変化する顧客ニーズに応え続けてきた。現状、東京港の一部コンテナターミナルでは、その取扱能力を超える輸入貨物量の増加により、朝夕のゲート受付にトレーラーが待機の列を成している。これらは回転効率の悪化は元より、運転手の長時間労働の原因となり、延いては輸送業者の減少つまりは日本の輸出入を支える物流インフラの危機を招いている。諸外国のコンテナ港湾では24時間ゲートオープンが当たり前だ。こうした状況の打開策としてターミナルゲートでの受付時間拡大が待たれる。堅く大きな障害があろうとも、また潮は流れ風が吹こうとも、まさに「石に立つ矢」の如き同社の誠心誠意は、人を動かし荷物を動かし続ける。

品川区八潮2・7・8